

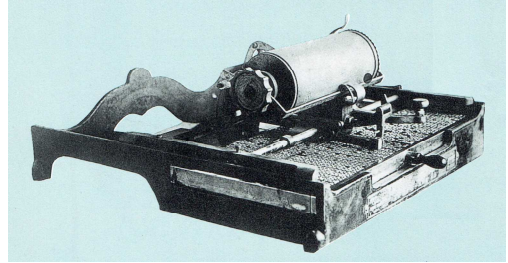
職業婦人タイピストの誕生

—和文タイプライター—

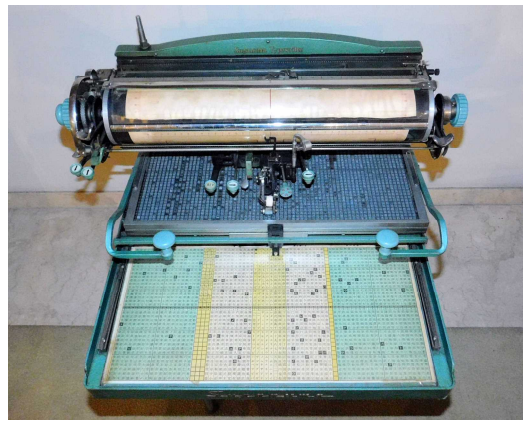
■和文タイプライターの誕生

黒澤貞次郎(1875-1963)は、小学校の時に漢字が書けなく恥ずかしい思いをした経験があった。このことがあり、1893(明治26)年にアメリカに渡った際、エリオット・ハッチ社で英文のキー数が「いろは」の文字数とほぼ同数であることからこれをひらかなに置き換え、さらに90度倒して縦書きのできるひらかなタイプライターを考案した。帰国後、1917(大正6)年には電信用にカタカナタイプライターを考案する。

杉本京太(1882-1972)も少年時代より習字が苦手であった。筆と硯を使わなくてもよい文書作成のため、1915(大正4)年に2400字ほどの活字盤から一字ずつ索字する直接平盤式というタイプライターを発明する(写真1)。しかし、この活字は、印字上、上下が逆であるので索字が難しい。菅沼整一(1894-1958)は、1931(昭和6)年、活字盤と同じ配列ではあるが通常に向いた文字盤から必要な文字を索字すれば印刷できる間接平盤式を考案する(写真2は1981年製、手前が文字盤)。(注:欧文に対して邦文、英文等に対して和文が対応するが、ここでは、いわゆる漢字・かな・カタカナ等が交じった日本語文書を「和文」としている。)



【写真1】 杉本京太の直接平盤式



【写真2】 菅沼整一の間接平盤式

■職業婦人としてのタイピストの登場

その当時の文書は男性が筆と硯で書くのが慣例で礼儀でもあったが、タイプライターの文字は鮮明で分りやすく、次第に官公庁・企業に導入されてゆく。当初は男性が使用したが、次第に男性が草案し清書は女性のタイピストが担当するようになる。

文書作成は教養が必要である。そのため、タイピストの多くが高等女学校出身者であり、処遇もよかった。1927(昭和2)年のある定期刊行物ではタイピストたちを「職業婦人」と書いたが、仕事着は着物が多く(写真3)、夜は、着物から洋服に着替え銀びらするニュースも見掛けるようになる。

■戦後のタイピスト —職業婦人からOLへ—

直接平盤式和文タイプライターは構造が簡単であり、文字が逆に向いていたが訓練をすれば使いこなせ、次第にこれが主流となっていく。この訓練を積み、早く体裁よい文書作成ができるタイピストが「プロ」と呼ばれる。英文タイピスト(写真4)は、このような訓練は必要としなかったが、英語ができることが誇りでもあった。

戦後から高度成長期に掛けて、タイピストの需要は増してゆくが、



【写真4】 英文タイピスト

出典：国立映画アーカイブ「婦人の職業 優しき力」1926年



【写真3】 和文タイピスト

出典：国立映画アーカイブ「婦人の職業 優しき力」1926年

同時にタイピングが業務に追い付か

ず、重要書類以外は、しばしばタイプライターを素通りして手書きもされる。また、簡便なタイプライターの普及もあり、次第に専門職としての影も薄くなり、「職業婦人」は「OL」になってゆく。そして、1980年代に修正と保存ができるワープロが発明され、タイピストは消えるが、しかし、タイプライターが女性の職業的自立に及ぼした影響は、歴史的には洋の東西を問わず極めて大きかった。

(高木清秀、三宅章介)